魔法少女リリカルなのはstrikers~幻想から、尊き人たちへ~

瀬津

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの〝戦い〟からちょうど半年。クラウド・ストライフはある〝噂〟の真偽を調べるため、ティファ・ロックハートと共に北の森へ赴く。

一方ミッドチルダではジェイル・スカリエッティの事件から一ヶ月。突然現れた強力な〝魔物〟によって混乱の渦中に。

そして、エフィネアでは暴星魔物が暴れだし……三つの世界の事件が繋がる時、物語の歯車は動き出す……！

えー、要するにリリカルなのは×ＦＦ７×ＴＯＧｆのクロス小説ってことです。オリジナル設定、一方的な補完などが横行すると思われますので、そういうのは嫌じゃ！と

いう方は流れるような動きで左上の戻るボタンをクリックしてくだせぇ

目次

始まり 1
エフィネア 16
邂逅 30
泉下の戦い 1 46
泉下の戦い 2 63

始まり

『最近、北の森で魔物が出るらしい。しかもとても強いらしい。ついでに大きいらしい』

ミッドガル跡地に出来たエッジの一角に佇むバー『セブンスヘブン』での客の主な話題は、そんな噂で持ちきりだった。

やたら『らしい』が多い噂だ。しかし噂とは得てしてそういうもので、事実と憶測が綯い交ぜとなり、信憑性は殆どない。普段の彼女なら、適当に流して終わっただろう。

だが、今回は噂する人が多かった。店の常連からフラッと訪れただけの流れ者まで、誰もがその話を一度は口にする。

異常だ。店の主――ティファ・ロックハートはそう思い、幼馴染のクラウド・ストライフを引き連れ、件の森へ様子を見に行った。

物語は、そこから始まる。

＊

からりと晴れ上がった空、その下に広がる荒涼な大地。夏空の青とやせ細った大地の灰褐色が対照的な印象を与える。そんな荒野を、黒々としたモンスターマシンが時速１００キロオーバーで駆け抜ける。

それは人を二人乗せていた。運転している男性に、長い黒髪の女性が胴体に腕をまわして必死になって捕まっている。

「ちょっとクラウド!!　スピード落としてよ!!」

運転手にしがみ付いている女性が結構な声量で怒鳴った。が、当人は聞こえていないらしく――

「よし、エンジンも温まったな。これなら……」

「人の話聞いてる?!」

更に加速しようと、アクセルをグイグイと廻す。

完璧にスピードに取り憑かれている。いくらここが荒野で人がいなくても、そんなスピードを上げられたら大変だ。というか髪の毛がグシャグシャになるから嫌なのだが。後怖いし。

（……いつからこの人はスピード狂になったのかしら?）

女性――ティファ・ロックハートは思わず内心でぼやいてしまった。

少なくとも、世界を救う旅をしていた頃はこんな感じでは無かったはずだ。いや、兆候はあったかもしれない。ゴールドソーサーのゲームセンターで高スコアを必死になって出していた気がする。

（凝り性がこの手の乗り物に手を出すと、改造かスピードに拘りだすのかしら……）

上昇するスピードと比例するようにしがみ付く力を強めつつ、ティファはため息をついた。

＊

「着いたぞ」

「……ええそーね」

目的地に着いた時、ティファはやたらと機嫌が悪かった。受け答えに変な棘がある。

「ティファ、どうした？」

再度声を掛けると、今度は呆れたような表情でこちらをちらりと見て、はぁ、とため息を零した。

「……何もないわよ」

（明らかに何かあっただろ）

クラウドは、心の中ではそう思ったが、口には出さなかった。さっさと剣を取りに行く事にした。こういう時は、あまりしつこく聞かない方がいい。変にほじくり出して喧嘩にでもなっても意味が無い。

ボタンを操作すると、ブシューと空気が抜けたような音がした。その後、弾かれたように『フェンリル』の右サイドから三本。左サイドから三本の、計六本の剣が飛び出す。

クラウドは、それらの内二本の長剣を『合体』させて背中に負い、残りを腰にある革

製の鞘に差し込む。
「準備、出来た？」
「ああ」
　声をした方に目線をやると、ティファが待っていた。様子からして、どうやら期限が元に戻ったらしい。
「行こうか」
「そうね、あ、クラウド？」
「なんだ？」
「バイクでスピード出すの禁止」
「は？　……ああ、そうか」
　何を言い出すんだ、と一瞬言おうとしたが、今回の機嫌の悪かった理由が解ったので反論するのは止めた。
「しょうがないな」
「しょうがなくないわよ」
　歩きながらそう言うと、ティファはムスッとした表情になってそっぽを向いた。少し微笑ましくも感じたが、二十歳過ぎの女がその反応をするのは色々と厳しくないだろうか。

「……それにしても、こんな所に森があったのね」
「ああ、俺も初めて知った。エッジの北側は人が住んでいる所も無いしな。仕事でこんな所には寄りつかない」
　クラウドの仕事は運び屋だ。二年ほど前のある大事件、魔物の大量発生などのせいで人の住んでいる集落同士の物なり人なりの交流が薄くなっている。それでも完璧にゼロなわけではなく、自分では魔物が闊歩する大地を行くことができないといって、人づてに頼む者が増えていった。クラウドは、そんな人たちの荷物を運ぶ仕事をしているのである。
「でも、変な森……」
　さっきのむくれた顔とは打って変わって、彼女は思案顔になった。確かに、奇妙だ。この森の手前百メートルくらいまでは、草一つない荒野。なのに、それ以降は、まるで線引きでもされたかのように緑が増える。
　森には自然が溢れている。足元には草葉が生い茂り、天を仰げば大木が思い思いに枝を伸ばし、葉を付けていた。恐らく他の生き物もいる筈だ。だというのに――
「動くものの気配がしないな」
「そうなのよねぇ」
　クラウドたちは、魔物どころか羽虫一匹見かけていなかった。これ程の自然が広がっ

ているのなら、何か居てもおかしくない。しかしその手がかりすら見つけられずにいる

「魔物も居なきゃいいんだけど……」

「さてな」

何にせよ、自体をはっきりさせるためにしばらく歩く必要があるだろう。草を掻き分けながら歩くのは少々辛いが。

＊

鬱蒼とした森を歩いて二十分。ひたすら歩き続ける二人が、もういい加減に帰りたくなってきた頃に、開けた所に出た。そこには、木が一切無く、見渡す限りに色とりどりの花々が地面を彩っている。端には小川が流れ、清廉な水を湛えている。

俗に言う『お花畑』である。

「わあ、綺麗！」

「すごいな……」

二人からは感嘆の声が上がった。ジャングルもかくやという薄暗い森を抜けた先がお花畑。感動するなと言う方が無理な話だ。

「ここを見つけられただけでも、今日来た意味があるわね！」

「……流石にそれは無いと思うが？」

瞳をキラキラ輝かせたティファは、無遠慮にその風景に足を踏み入れる。

「待てティファ。まだ安全かどうか……」
「平気よ、ここは見晴らしも良いし」
（それだけの理由でそんな無防備に歩くのはどうなんだ……）
　スタスタと何の気無しに進む彼女を追う。その後ろ姿に、どこか浮足立った雰囲気を感じる。しっかり者の彼女にしては珍しい。
「すごいわねー。シロツメクサにススキにパンジー、チューリップもあるわね。あ、あっちの小川にスイレンが咲いてるわ」
「何でそんなに花の種類が解るんだ……？」
「このくらい、誰だってわかるわよ。うーん、でも……」
　そこで言葉を切り、ティファはキョロキョロと辺りを見回した。まるで何かを見比べるかのように。
「どうした？」
「おかしいのよ」
「……？」
　どこがおかしいのだろうか。確かに森が突然途切れたのは変な感じはするが、気にするほどでもないだろう。
「クラウド、チューリップって夏に咲くかしら？」

「……遅咲きか何かじゃないか？」
「それでも七月の下旬まで残るかしら。うろ覚えだけど、遅咲きの品種でも五月までだったはずよ？それがこの蒸し暑い夏にここまで綺麗に咲くなんて……」
そこまで言われて、ようやくクラウドは彼女の言おうとしていることを把握した。
「そうだな、確かに変だ。それに、あそこの小川にある花は、普段は池とか沼に咲くんじゃないのか？」
「ええ、そうよ。スイレンは、湖沼の植物よ」
季節違いの花。普段そこでは芽吹かない植物……これらが示すことは何だというのだ。クラウドたちには、皆目見当も付かなかった。
「……何か、不気味に見えてきた」
思わず、といったふうにティファは先程のはしゃぎ様とは一転して後ずさった。
そんな不可思議な景色は、もはや美しいモノでも何でもない。自然から逸した異形の風景、という感想に変化していた。
理由が解らないものに人間は恐怖を覚える。ティファが感じて、クラウドが同様に思わない筈がなかった。
クラウドは、自然な動作でティファの手を取った。
「そうだな。ティファ、早くこの場から離れ……」

――ズシン……

不意に地響きが鳴った。

「……タダで行かせてくれるわけでもないみたい？」

「そうだ……な」

二人は、一瞬にして悟った――件の魔物が現れたことを。

繋いだ手をほどき、クラウドはその手に大剣を。ティファはその手にグローブをはめた。

木々をなぎ払いながら、さっきまでクラウドたちが彷徨っていた森から、魔物がその姿を現した。

首を覆う黒く艶のついたたてがみ。色の濃い、紫の毛皮。威嚇のつもりか鋭く尖った犬歯をガチガチと鳴らし、低く唸り声を上げている。体全体のフォルムからして狼のようだ。だが――

「お、大きい……」

体高は三メートルにもなろうか。更に顔だけでもクラウド達の上半身くらいはあるだろう。明らかに通常の獣型のモンスターとはスケールが違う。

「少し骨が折れそうだな」

「食べられちゃうかもね」

「……怖い事言うな」

――ごおおおおお！

獣の咆哮を合図に、二人は駆けだした。

向かって右側にいたクラウドに向かって鋭い爪が迫る。

クラウドは振り下ろされた前足を右に避け、敵の胸部目掛けて大剣を突き刺す。が、浅いらしく、絶命させるには至らない。それでも剣を引き抜くと、傷口からおびただしい量の血が流れた。

「ちっ……」

そのまま着地する。間髪入れずに今度は右足の薙ぎ払いが襲う。

（かわせないな……）

回避は不可能。早急に大剣を盾代わりにガードする。

巨体に似つかわしい、重い一撃がクラウドの体を貫き、宙にはじき飛ばす。結果、クラウドはおおよそ十メートルほど吹き飛ばされた。

（つ……！）

あまりの衝撃に受け身を取り損ね、顔面を草花に叩きつけた。なかなか無様な着地だ。

「クラウド、大丈夫?!」

見かねて、ティファが自分の方に走り出す。だが、このタイミングで相手を視界から外すのは悪手に過ぎない。

「俺にかまうな！」

「！」

「倒すんだ」

「……わかった」

駆け寄って来ようとするティファを二言で制止し、そのまま起き上がる。どうやら真意は汲み取ってくれたようだ。

一瞬、視線が魔物とカチ合った。

殺意と怒りで濁った瞳は、すべての生物に等しく恐怖を植え付けるものだった。だが

――

（どうやらさっきの攻撃で怒ったようだな……）

クラウドは内心ではほくそ笑んでいた。ほぼ計算通り。そう思った次の瞬間――

「やあああああ！」

ティファの気合いの声と相手の顎が跳ね上がったのは同時だった。

魔物は花弁と青葉を舞い散らせながら仰向けに引っ繰り返る。ティファは、その背に比べて存外に白い腹の上に悠々と着地した。

「うん、ドルフィンブロウはやっぱり威力が高いわね。アッパーだし」
そうやって笑った彼女は変わらない技のキレにご満悦だった。
もの凄くイイ笑みである。
「でも、あっけないな。もう少し歯ごたえがなくっちゃ」
「お前、バトルマニアか何かか？」
「な、何よ突然！　違うわよ！」
いや、さっきの清々しい笑顔は正しく戦闘狂の顔だ。まったく、何時からこんな風になってしまったのだろうか。一か月くらい前、エッジに迷い込んできた魔物を追いだした時、凄く良い顔で魔物をボコボコにしていた。何が彼女を変えたというのだ。日ごろからうっぷんが溜まっているのだろうか。
「さ、さあクラウド！　止めを刺して、ね？」
（露骨に話題を逸らしたな……）
クラウドとしてもこれ以上この話題に突っ込む気は無いので良いのだが。
（やれやれ……）
心の中でため息を吐き、大剣を再度構える。
大きく息を吐き、身体の中にある〝チカラ〟を引き出すイメージを、頭の中で描き出す。

（俺に、力を――）

クラウドの身体から、淡い緑色をしたオーラが湧き上がる。

「何時も思うけど、その力、何なのかしら？」

「さあな」

この〝オーラ〟は、半年ほど前の〝ある事件〟から現れるようになった。基本的にクラウドが望めば出てくる。使い方は様々で、魔法を用いたバリアを無効化したり、オーラ自体打ち出して飛び道具のようにすることもできる。

「気にする事は無いだろう。今のところ、害は無い。それに、これのおかげで外敵を追い払うのが楽になった」

「でも、不安だなぁ……本当に何もない？」

「自分の体の事は、自分が一番解るものさ」

安心しろ――そう言って、クラウドは目の前のモンスターの脳天目掛けて、大剣を振りかぶった。

「はぁ！」

――ボチュッ

大剣を叩きつけたことにより、骨と脳みそが一緒くたになって砕ける。更に切っ先から、クラウドが纏っていたオーラと似た色合いの閃光が迸り、黒々とした巨体を切り裂

く。

そうして丁寧に二分割された遺体からは、おびただしい量の血が流れた。それらは、地に根を張るモノたちを、呪われた様に不吉な紅に染めていく。

「……今日は、お肉は食べたくないわね」

「確かに……」

クラウドは付着した血をふるい落としながら、彼女の意見に同調した。

少々グロテクスな光景に、二人は揃って青い顔をしていた。やった本人は兎も角、隣で見ていた彼女も、あまり気分の良いものではないだろう。

「じゃ、帰りましょ？　くれぐれも安全運転で」

「善処する」

くるりと死骸から目を背け、二人は再び薄暗い森へと歩を進めようとした。おそらく帰りは安全な筈だ。

（……？）

だが、クラウドはその時嫌な気配を感じた。何か、底の無い大穴が空いたような——

（何だ、この感覚は……）

不安を振り払い、後ろを振り向いた。

「これは……！」

殺した魔物の身体が、光っていた。赤く、黄色く、青く、白く……様々な色を放つそれには、莫大な〝何か〟が溜まっていることを、クラウドは頭より先に直感で理解した。
（放っておけば、大変な事になる！）
「クラウド！　待って！」
ティファの制止を振り払い、おそらく危険なソレに向かって駆け出す。
頭の中で、ガンガンと警戒音が鳴り響くような危機感があった。それと同時に、アレを止めるなら同じくらいの力をぶつけねばならない、という考えが行動の根拠だった。
（チカラを使って、相殺する！）
決意と共に再びオーラを解き放ち、目標に叩きつけた。遺体は、その一撃により消え去ったが、そこには――
ぽっかりと、虚ろな大穴が宙に生まれていた。

エフィネア

最近の魔物騒ぎには、管理局の誰もかれもが辟易している。

三人の仲間と一緒に遺跡を探索しながら、ティアナ・ランスターは一人勝手にそんなモノローグを展開していた。

独特の意匠を施した壁は、過ごした時の長さを主張するかのように苔むしており、おまけに日光は届かない。空間は、宙に浮く謎の発光体でなんとか光度を保っている。故に薄暗く、ただでさえ最近、忙しすぎてうっぷんが溜まりがちで暗くなっていた彼女の気持ちを薄暗くさせる。つい一人モノローグするくらいにはおセンチになっていた。

そもそも、何でこんな所に居るのだろう――足取り重いまま、ここまでの経緯を思い出していく。大体、転移の時にトラブルが発生し、こんなよく解らない建物らしい物に誤転移したのが……ではない。

（あの時、八神隊長が……）

＊

『エフィネア？』

「そ。そこに行って、色々な調査をして欲しいんよ」
午前の仕事が終わり、さあこれから窮屈と退屈のデスクワークだ、と覚悟を決めたところで我らが部隊長八神はやてに呼ばれたフォワード陣――ティアナ、キャロ、スバル、エリオの四人は驚きの意を込めながら揃って声を上げた。
全員、聞いたことが無い名称だった。いや、それ自体は別に大したことは無いのだ。この管理局に勤めている以上、知らない世界に行く事なんてざらにある。しかし、だ
「八神隊長、失礼かもしれませんが、言っても良いでしょうか？」
「どーぞ」
「この大変な時期に私たちをそこに行かせる意味はあるんでしょうか？」
今、ミッドチルダは魔物襲撃事件で混乱の極みにあった。
つい一週間前からである。突然異形の化け物が、この第一管理世界各所で突発的に出現し、そして暴れてはその場にいた人間とともに消えるという事件が多発していた。原因は不明。犯人は不明。そもそも犯人がいるのかも不明。ついでに消えた人間の行き先も不明。不明不明不明不明……何にせよ、人的被害も随分なものなので、管理局本部も看過できずに、最近やっきになって対処に追われている。
そして、問題なのはその現れる魔物だ。
まず、強力な魔法攻撃を放ってくる。一体で炎、凍結、電気の変換魔法を行使するも

のは掃いて捨てるほどいるし、突然何も前触れなく広範囲殲滅級の魔法を出してくるのだからシャレにならない。挙句、それらはバリアジャケットでは軽減できない。調査によると、技術体系が人間の使っているベルカ式やミッドチルダ式とは全く違うせいで近代ベルカ、ミッドチルダ式のバリア類が適応しないというのだが、そこら辺の話は置いておくとしよう――続いてやたらしぶとい。例を挙げれば、我らがライトニング部隊隊長のザンバーを喰らってもまだ平然と立っていたのだから、驚きを通り越して呆れたものだ。

倒せなくはないのだが、それなりの数の魔導師を向かわせなければ一体倒すのに時間が掛かり過ぎる。そもそも変則的且つ威力の高い魔法を持つ手強い手合いなので、そんじょそこらの魔導師では焼け石に水。これだけでもげんなりするのに、奴らには更に厄介なものがある。それは――

こちらの攻撃を、完璧に無効化する手段を持っている個体が居る事である。

魔物たちは大方二種類に分類される。一つは、我々がよく知っている熊や狼などの動植物を二倍から三倍ほど肥大化させ、更にごてごてとした突起やら爪だとかが目立つ外見特徴を持つタイプ。これらは前述した魔法攻撃、ふざけた耐久力以外には脅威となるモノは無い。

しかし、もう一つの方が厄介なのだ。

そいつらの特徴としては、まず、全体的に黒い体躯をしているのが挙げられる。サイズはそれほど大きくなく、魔法もそこまで強くない。基本的な耐久力は同じくらいであるが、問題なのが、やつらが気まぐれに張る紅いバリアだ。

このバリアは、一種の防御魔法らしく、魔物の身体を包み込むように展開される。そして展開されたが最後、全ての物理的衝撃、および魔法全般が効かなくなり、もはや成す術が無くなるのである。

このバリアを持つ黒い魔物のせいで、管理局員は毎日毎日魔物を追っ払ったり一般人を避難させたりそれらの報告を纏めたりと非常に忙しい。タダでさえこの前のあのマッドサイエンティストの事件で、色々な後始末をやらされて多忙を極めていた時空管理局員は、地獄の底の責め苦のような苛烈な忙しさに追われているのだ。現に、目の前に居るはやても大量の報告書類を読み進める手を止めないまま話している。

「まぁ、ティアナの言ってる事ももっとも何やけど、どうにも今回の〝魔物事件〟に関係がある世界らしいんや」

「……どういうことですか？」

スバルが聞いた。頭脳労働より肉体労働なわが親友でも、まだ話にはついていけるらしい。

「その世界を偶然発見した艦船の報告やと、その世界にも例の魔物と同種のものが確認

されたそうなんよ」
「あの、その世界は、どんな世界でしたか?」
「人口は推定十一万六千人程。三つの国からなる自治体系を取っている。まあ、争いとかは起こってないみたいやから、比較的平和な世界や……」
エリオの問いに、はやて部隊長は語尾を濁した。
「どうしました?」
「あんなぁ……この世界、〝魔物〟一杯おんねん」
『えぇ!?』
「黙っててもしゃ―ないから言っとくけど、〝魔物〟の数がバーゲンセールもびっくりの量らしいんよ。お陰で、本局のお偉いさんは『んな死地に自分の部下送れるかっ!』とか言うて盥回しして、結局うちまで調査任務が回ってきたんや……」
機動六課という部隊は、あらゆるゴリ押し裏技ちょろまかしを使い、作られた部隊だ。大方、そこらへんのことをつっかれて封殺されたのだろう。両肘を机に付き、指を組みうなだれる彼女の姿に、中間管理職特有の哀愁と気苦労が垣間見えた。
ちなみに、その場に居た者――部隊長の隣のミニデスクで報告書のチェックを鬼の形相で捌いていたちっちゃい上司も含む――は
(あぁ、上の人にごり押しされたんだなぁ)

と全員そろって彼女の気苦労を察した。

＊

「はぁ……」

「ティアナさん、どうしました？」

「いや、なんでここにいるんだろう、と」

「……そんなこと言ったって、選択肢なかったですよ僕ら……」

「……あんな状態の八神隊長に言われたんじゃ、断れないわよねぇ」

「あそこまで憔悴したはやてさん、始めてみましたよ僕は……」

「私も……」

ちびっこ二人は当時を思い出し、どこかショックを受けたような顔をしていた。仕方ない、だって私も何とも言えない気分になっちゃったもの。

この状況の始まりは、どうしようもない物で、結局のところ、誰も恨めない恨みたきゃ自分の運命を恨めばーか、という結論にティアナは至った。

「ねぇティア～？　何時になったら外に出れるの～」

「うっさいバカスバル私に聞くな」

親友のねっとりした口調に対して毒を吐く。正直、誰かに聞けるものなら聞きたい気分だった。

もうどれくらい歩いただろう。歩けども歩けども、変な移動床とよく解らないオブジェが点在しているだけ。それらを使って離れた足場を移動し、時にはキャロが従える白竜フリードに運んでもらいながら（フリードに乗って移動するというのも考えたが、残念ながら彼（？）は基本二人乗りなのだ）ひたすら下に下に進む。運がいいことに、あの『魔物』たちとは未だ出会っていない。居るのは、なんだか野生生物にちょっと毛が生えたみたいな可愛い連中ばかりだ。

「何にせよ、外に出ないとね」

「これだけ縦に空間を取れる建築物なんて、結構技術力のある世界なんですね」

「案外、古代遺産だったりして」

そんな他愛もない話をする。危険地帯に特攻させられ、その後もトラブルで踏んだり蹴ったりな状況だと、こんなどうでもいい話が癒しになるだ。ちなみに、誰がどう見てもここ古代遺跡だから、スバル。

＊

しばらく歩いた結果、開けた場所に出た。そこは、どうやら地下水源か何かがあるらしく、視界いっぱいに真水が溜まっている。その馬鹿でかい水たまりの真ん中には、誰かの手で丸く切り取られたかのような岩石が浮き上がっていた。

地下に潜ってしまったようだ。内心でものすごい絶望感と虚無感を感じつつ、ティア

ナ達一行はその広間を見た。
「あそこに何かありそうだね」
「どうしますか？」
「……言うまでもないわ。行きましょ」
　元々、今回は調査任務だ。幸いにも道は続いており、人一人がやっと通れる程度の細長い道が続いている。
「警戒してね。スバルが先頭、エリオはキャロと一緒にフリードに乗る。私が殿」
　手早く隊列を指定し、慎重に目的地に向かう。
　警戒したが、特に大したこともなく浮島に着いた。皆がほっとした顔をしたのは言うまでもない。何も起きない所為でうっかり忘れそうだが、何せここは例の魔物が跳梁跋扈する死地。いつ絶体絶命のピンチになってもおかしくない。
「ティア、何か見つけたよ」
「ん、どれどれ？」
　先頭を行くスバルの向こう側を見やる。
　そこには、何かの制御装置のようなものがあった。とても大きく、何人もの人員を投じて操作することを前提とした設計のようにも見えた。
「何なんでしょうね、これ」

「キャロ、むやみに触っちゃダメよ」
未知の世界の未知の技術だ。そこまで文明が進んでいなくても、それは変わらない。ヘタに触って大惨事ではお話にならない。警戒は最大限するべきなのだ……さっきまではだいぶ緩んでいた気もするが。
軽く注意すると、キャロはいそいそと装置から離れる。ティアナは、全員が離れたのを確認すると、事前にインストールさせていたデバイス用の解析ツールを起動させた。
「お願いね、クロスミラージュ」
《了解》
機械的なミッドチルダ言語の後に、銃型の白いデバイスからスキャン用のレーザーがその正体不明の装置に向かって照射される。
待つことき っかり十秒。光は途絶えた。どうやら解析が終わったようだ。
《マスター、終わりました》
「何かわかった?」
《はい。どうやら何らかの供給装置の制御システムのようです》
クロスミラージュが、よどみなく答えた。
「制御システム……」
「供給って、なんのだろうね」

《これ以上の解析は一デバイスの出力では不可能と判断しました。何十にもわたるプロテクトでプログラムが保護されており、その一つ一つも相当複雑です。プログラムへの深い干渉には相応の時間とマシンパワーが必要でしょう》

これまたよどみなく結論を言い放つ。

彼女(?)の意見から鑑みるに、おそらくこの装置はかなり重要なものなのだろう。なら、これ以上の深追いは現状では無用だし、不可能だ。

「ん、ありがとう」

《お気になさらず》

そう言った後、クロス・ミラージュはカード形態に戻った。ティアナはそれを腰のポケットに無造作に突っ込む。

(このくらいしかわからないか……)

事前に調べられていた文明レベル程度なら、自分たちのデバイスの解析ツールで十分なはずだ。報告漏れがあったのだろうか?それならば、どう考えても情報課のミスだ。

これでは調査も何もあったものじゃない。なんだか行き当たりばったりである。

「……どーしよ」

昇るか……またはフリードとキャロを使いに出して、この空間を調べてみるか……どれも正しい判断とは思えない。

「ティア、ちょっといい？」
「なに？」
　スバルに語りかけられ、振り向く。すると、スバルは後ろで待機している年少組をこっそり指さした。
「キャロとエリオが、もうそろそろ限界だと思うんだ。いい加減、休もうよ」
「……あー」
　見れば、二人共かなり消耗している様子だった。キャロに至っては、へたり込んでぼーっとしている。
「……そうね、ここいらで休憩にしましょうか。焦っても仕方ないし」

　数々の仕掛けを解きながら、五人組の集団が下に下にと進んでいく。
　一人は四十代そこそこの男、あとはまだ成人もしていないであろう若者だ。
　空間には、五人の足音、それとたまに交わされるささやかな会話のみが響く。
　周囲は大昔のアンマルチア族が設置してそのままだという発光体で何とか光度を保っている。
「アスベル」
　誰かに呼ばれ、声の方へ振り向くと、その主は静かな、しかしどこか威厳のある物腰

の中年男性だった。
「どうした、さっきから上の空だぞ」
「あ、すいません」
　指摘され、思わずハッとした。確かに注意が散漫になっているのは否めない。
「……色々思うことはあるだろう。が、思考に浸かり、それが元で命を落としてはシャレにならん」
「わかっています……」
「もういい加減、切り替えろ。今回の任務が終わった時、じっくり考えてやればいい」
　簡単に片付くものでもないだろうが、と付け加え、男性――マリク・シザースはそれきり口を閉じた。
　無二の友人にして若き国王に、この星の重要なシステムである大輝石の管理装置の調査を頼まれる前、青年――アスベル・ラントはある問題に直面していた。今まで考えてもいなかったような問題だった。指摘されるまで、自覚することすらなかった。
（ソフィ……お前はどうしているんだ……？　俺は――）
　今ではどこにいるのかもわからない彼女に思いを馳せる。
　どう言えばよかったのか？先程から、彼の頭の中はそんな自問自答で埋め尽くされている。おかげで剣を振るう動きは鈍り、無用な怪我をしては世話焼きの幼馴染と利口な

弟に注意と心配ばかりさせている。

情けない気分だった。

「皆、ここの昇降機で最下層まで一気に行けるよ」

背中ほどまである長く煌びやかな金髪を靡かせた青年が声をあげ、知らした。

＊

水で満たされたその空間は、中央に岩石でかたどられた浮島以外は何もない、非常に殺風景な場所だ。

「結構長い道のりでしたね」

メガネを指で少し押し上げながら言ったのはアスベルの実弟であり、異国ストラタの将官であるヒューバート・オズウェルだ。蒼いストラタの軍服に身を包んだ彼は今回、彼の国が送ってきた調査団の団長として参加している。ちなみにマリクは北国のフェンデルの使いである。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

「陛下、楽しそうですね……」

かなり楽しそうに呟いたウィンドル現国王リチャードに小声でツッコミを入れたのは、アスベルの幼馴染であるシェリア・バーンズ。立場としては一般人も同然なのだが、彼女自身が優秀な治癒術師であるが故、この魔物がはびこる地下遺跡の調査に協力して

もらっている。
「！　皆、待ってくれ」
アスベルは中央の岩場を見て、あることに気づき、全員に声をかけた。
「なんだ、あれは……」
「人だ……ね。どう見ても」
そう、人が居る。四人だ。遠目には、同系統の白い服を着ている程度しか判らないが、この場に居るのはどう考えてもおかしかった。
この遺跡の一番下にある制御装置は、大輝石の機能を調整するという非常に重大な役割がある。故にこの空間に立ち入るための唯一の転送装置は厳重に警備されており、王であるリチャードが容認した者以外は入れない。
「どうやって入ってきたのかしら……？」
「とりあえず、直接聞くしかないだろう」
マリクはそう言い、武器も構えずに中央部までスタスタと歩いていく。
「ちょ、マリク教官！」
ヒューバートの静止の声も聞かない。残された四人――内、一人だけはいつでも応戦できるように、武器を取り出してから――走り出した。

邂逅

水で満たされたその空間は、中央に岩石でかたどられた浮島以外は何もない、非常に殺風景な場所だ。

「結構長い道のりでしたね」

メガネを指で少し押し上げながら言ったのはアスベルの実弟であり、異国ストラタの将官であるヒューバート・オズウェルだ。蒼いストラタの軍服に身を包んだ彼は今回、彼の国が送ってきた調査団の団長として参加している。ちなみにマリクは北国であるフェンデルの使いである。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

うっすらと笑みを浮かべ、リチャードは呟いた。その目はどこか嗜虐的な色を写していた。

「陛下、楽しそうですね……」

かなり楽しそうに呟いたウィンドル現国王リチャードに小声でツッコミを入れたのは、アスベルの幼馴染であるシェリア・バーンズ。立場としては一般人も同然なのだが、彼女自身が優秀な治癒術師であるが故、この魔物がはびこる地下遺跡の案件に協力して

もらっている。
　アスベルは、この空間に自分たち以外の人間が居ることを察知した。薄暗い空間で、必死に目を凝らし、その気配が何なのか突き止めようとする。
　そうして、一分もしない内に、それを突き止めた。
「！　皆、待ってくれ」
　アスベルは中央の岩場を指差した。
「あそこは……」
「人だ……ね。どう見ても」
　そう、人が居る。四人だ。遠目には、同系統の白い服を着ている程度しか判らないが、この場に居るのはどう考えてもおかしかった。
「どうやって入ってきたのかしら……？」
　シェリアがつぶやいた。確かに不可解だ。この遺跡に入るための転送装置は、既にウィンドル――この場所を収める王国の名である――の兵士たちに抑えさせてある。他の入口が無いことも調べが付いている。一般人が偶然立ち入ってここまで来てしまうということは、そうそうないはずだ。
「どうします？　捕縛しますか」
　ヒューバートが提案する。軍人の彼としては、不審な人物をそのままにしておくのは

あまりいい考えとは思えないのだろう。
そんな彼の顔をマリクは一瞥した。
「とりあえず、直接聞くしかないだろう」
マリクはそう言い、武器も構えずに中央部までスタスタと歩いていく。
「ちょ、マリク教官！」
ヒューバートの静止の声も聞かない。残された四人――内、一人だけはいつでも応戦できるように、武器を取り出してから――走り出した。

＊

硬い軍靴が砂利を踏みしめる音で、ようやく『何か』が近づくのに気付き、ティアナは即座にデバイスを起動し、物音の方向へと構えた。
「誰!?」
白い銃身の先五メートルには、一人の男が立っていた。
目の前にいる男は、枯葉色のジャケットにその筋骨隆々とした身を包み、華麗で少々くすんだらしい金髪は後ろに撫で付けている。蓄えたひげのせいか、どこか胡散臭い。
（警戒はしておく……）
クロスミラージュを相手に向けつつ下げていた腰を上げ、ティアナは相手に舐められんと睨みつける。

油断は出来なかった。
今は武器を構えていないようだが、もしスバルと似たタイプの近接戦闘型なら油断できない。幸い、周りの三人もきちんと臨戦態勢だ。が、まだ別の人間がいることをクロスミラージュがティアナにこっそり知らしている。ちらりと大男の向こう側を見やると、四人ほど近づいてくる――そのうちの一人は両手に大口径の拳銃を携えている。
「おっと、そんな、いきり立つな。こちらには交戦の意思はない」
いけしゃあしゃあと男が言う。武器を向けられているというのに、随分余裕な態度だ。
「そんなこと言う前に、後ろの人の手にある物を下げさせてもらいませんか？　和睦の使者は、槍を持たないものでしょう」
「……随分なことを言うな」
たっぷり皮肉を込めて言ってみたが、意外にも男はすぐに従った。男の後方四人のうち青髪の少年の武器を下げさせて、到着を待った。
早速、先ほどの少年が男に向かって苦言を呈した。
「教官！　武器も用意しないで行くなんて……」
黒のハーフフレームのメガネと、きっちり着込んだ蒼いコートが相まって生真面目な印象を与えるその少年の言葉を、男はやれやれといった様子で諌めた。

「まあ、そう言うなヒューバート。確かにこの子達に害意があるのが判っていたら、俺だってこんなことはしない」
「今、彼女は武器を構えました」
「俺みたいな大男が後ろから突然現れたんじゃあ、武器の一つや二つ構えたくもなるだろ。年頃の娘は」
「そんな屁理屈！　そもそも僕はあなたの行動が迂闊だから」
「……あのなぁヒューバート、こういうことは」
「最初から喧嘩腰じゃ、話もできない……そうだろう、マリク？」
二人の口論は、ティアナたちを置いてけぼりにしたが、それは別の人物によって遮られた。
長く美しい金髪と、マント。ファンタジー小説か何かに出てきそうな凝ったデザインの翡翠色の衣服に身を包んだ、まるで一昔前の貴族のような出で立ちの青年に、言いたいことの先を越されたようで、『教官』と呼ばれた男は微妙に憮然とした顔になった。
「……陛下はなんでもお見通しのようで」
『陛下』と呼ばれた金髪の青年、『教官』『マリク』などと呼ばれた男性、『ヒューバート』と呼ばれた少年に、赤茶けた髪の色をした白い服の青年。女性もいる。臙脂色のジャケットに紫のミニスカート。ジャケットと同系色のくせっ毛が、彼女自身にふわふ

わとした印象を与える。
「私たちに争う気がないのは、本当よ。私はシェリア。おっきい人がマリク。金髪の人が判るかと思うけど、リチャード陛下。メガネの人はヒューバートで、残りがアスベル。えっと、よかったらあなたたちの名前を教えてくれない？」
　いつの間にか近くまで来ていたキャロやエリオに合わせたのか、まるで迷子の子供（実際そう見えているかもしれないが）に母親の所在を聞くかのような優しい口調でシェリアという女性は彼らの名前を告げた。
「おいシェリア、俺の紹介適当すぎないか？」
「私はスバル！　敵じゃないんなら本当に助かったよ。迷ちゃって大変だったんだ～」
　残り物扱いされたアスベルという青年が文句を言っているが、スバルはそれを無視して元気良く自己紹介をした。ついでにいらん情報まで説明せんでよろしい。
「ふっふっふ。元気がイイね。そこの君たちはなんて言うんだい？」
　リチャードが口元に笑みを浮かべ、キャロとエリオの二人に話題を振る。ちなみにキャロのフリードは、主人の白い帽子の中で小さくなっているらしく、辺りには見当たらない。
「おっと陛下、実は意外と年下シュミで？」
　先ほどのお返しと言わんばかりに、マリクがリチャードに悪口スレスレの軽口を叩

く。

「マリク、ここでやりあっても僕は構わないんだよ？」

マリクの軽口に、リチャードが反応して、マリクがそれに悪乗りして、他の人はそれを生暖かく見守る。

「……何というか、神経張り詰めらせる根気もなくなっちゃったなぁ……」

ここまでのやり取りを見て、ため息とともに思わずそんなことを呟いた。見れば、エリオ達も一緒になって笑っている。

きっと、本当に敵意はないのだろう。なんというか、今まで変に気合入れていたのが馬鹿らしく思えてくる。

「君は、なんて言うんだい？」

「あっ……名前？」

「そう」

ティアナは思わず、目の前の青年の顔をまじまじと見つめた。

右目が青く、左目が紫だ。虹彩異色、というやつだろうか。

「……何か顔についているかい？」

「あ、いえ、そんなんじゃないんです」

彼の瞳を見て、ティアナは、つい自分たちの教官の義娘を思い出していた。それで、思

わずまじまじと見つめてしまっていたのだ。
「ティアナです、先程は失礼なことをしました」
　謝罪の言葉と共にぺこりと頭を下げる。するとなんだか相手は恐縮しきって、
「い、いや、こちらこそごめん。とりあえず、君たちがどうしてここに居るのか知りたいんだが……」
　などと言った。なるほど、確かに彼らにとってはここにティアナ達がいることは奇妙だろう。
「えっと……」
　ここで困ったことになった。ここは管理外世界。管理局のことは何一つとして認識されていないだろう。それで、管理局の事などヘタに話して信じてくれるかどうか……
（ティア……）
　どうしたものかと考え込んでいたところで、スバルからの『念話』が聞こえてきた。念話は、魔力を持つ者同士なら脳内に言葉を浮かべるだけで会話できるとても便利なものだ。
（本当のこと話そうか、悩んでいるでしょ？）
（当たりよ……馬鹿正直に説明して、納得してもらえる自信ないわ）
（でもさ、信じてくれるかもしれないよ？）

（うーん……）
（もしかしたら協力だってしてくれるかも）
（……）
（前向きに考えようって！）
話せ話せと頭の中で強く訴えかけてくるスバル。こちらとしては、アスベル達に妙な解釈をされて、危険人物として引っ捕まえられる方が厄介なのだが、このまま押し黙ってやっぱり不審者としてとっ捕まえられるのも七面倒だ。
（しょうがない……か）
どちらにしろ、このままじゃ埒があかない。正直に話して信じてくれるなら儲けもの。危険人物認定されたら、六課から救助があるまで牢屋なり留置所なりで休憩タイムだ。
「話します、私たちがここに来た理由を」
ティアナは、語りだした。
＊
「――と、これが私たちのここに来た理由と、その他諸々の説明です」
『……』
目の前で棒立ちになって傍聴していたアスベルたち五人に向かって、ティアナは最後

の言葉を結んだ。
　時空管理局に、魔物の問題、そして誤転送でこの建築物に至ったこと……あらゆることをバカみたくそのまま話した。反応は、この通り呆気にとられているという感じだ。
「……確認するが」
　沈黙が続く中、マリクが口を開いた。
「君たちは別世界から来た人間で、その自分たちが住んでいる世界では魔物が暴れまわり、その解決方法を探しにエフィネアに来た。そして、手違いによりこの『風機遺跡』まで来てしまった……そういうことで合っているな？」
「はい、その通りです」
「ふむ……」
　マリクは腕を組み、ティアナ、スバル、エリオ、キャロの順番で目線を移していった。ティアナは、それが嘘を言ってないかどうか見定めているように感じた。
「どう思いますか、陛下？」
「君と同じさ、きっと」
　マリクの問いかけに、少し軽い調子で答えると、リチャードは若干下がった位置から聞いていた他の三人――シェリアとアスベル、それに依然訝しんだ目つきでティアナたちを見ているヒューバートの方を振り向いた。

「三人とも、僕はこの四人に出来うる限りの協力をしたいと思う。君たちも付き合ってもらって、構わないかい？」
「えっ……？」
　その言葉を聞いて、ティアナは思わず、間の抜けた声を発してしまった。なぜなら、その場にいた者で誰よりも彼女が、その提案に驚いたからだ。
　横を向くと友人が『どや、わたしのゆーことあってたっしょ！』みたいなしたり顔をしている。小突きたい。
「……失礼ですが、陛下」
　しかし、そのリチャードの申し立てに、メガネをかけた少年がまたも異議を唱えた。
「先ほどの話には何も事実を証明するモノがありません。それに、突拍子がなさ過ぎます。大体……」
「おっと、お小言はそこまでにしておこうか」
「ですが……」
「まぁ、君にも色々思うところがあるのは解るさ。けど、僕も考えなしでこんなこと言ったんじゃないさ。それに、こんな話聞いたら、僕の親友は無理にでも助けようとするだろうし……ね、アスベル？」
　突然自分の名前が話に出てきて、言われた本人はしどろもどろに

「いや、俺、そんなことは……」
「どうせ『今回の件が終わって落ち着くまでラントに滞在してもらって、その後手助けできることはできる限りしたい』ぐらい考えていたんでしょ？」
「……ぎくり」
　追撃でシェリアに指摘され、思わず俯いたあたり、図星なのだろう。それはそうと、この時ティアナは初めて、口で『ぎくり』と言った人間を見たのであった。
「……と理由の一つはこんな感じさ。後は……そうだね。出来れば君たちには僕らの手伝いをしてもらいたいのだが、構わないかい？」
「手伝い……ですか」
「そう、手伝いさ」
　エリオがチラリとティアナに視線を流す。最終的な判断は彼女に任せる、ということのようだ。
「……分かりました。私たちに出来ることであれば、是非」
　そう返答すると、金髪の美丈夫はさも嬉しそうに顔を綻ばせた。
「そうか！　ありがとう。こちらとしても、手練は多いに越したことはないからね。助かるよ」
「はい、任せて下さい！」

少し大仰なセリフに対し、スバルはやや興奮しているのか威勢良く答えた。

＊

長ったらしい前振りの後、リチャードたちは、何かの装置を地面に設置している。ティアナたちは、その装置を設置している間の護衛をやっている。

リチャードたちはこの遺跡に巣食っている魔物の退治に来ているとのことだった。ここに来るまでの道中、たくさんの魔物がリチャードたちに襲いかかってきたが、そろそろ移動しながら戦うのは辛い。ならば誘き寄せよう、という話になり、この場所でそれを行うことにしたのだという。

しかし、こんな撤退も補給もやりづらい袋小路のような場所でやる必要があるのだろうか。疑問に思ったが、それについてはメガネを掛けた堅物そうな（そう思っているティアナ自身も比較的にお堅い人である）少年が説明してくれた。

「この遺跡の上には、ウィンドルの城、バロニア城。そして、そのお膝元には城下町があります。仮に今回の作戦を入口近くでやった場合、魔物はすぐに地上に出てしまいます。そうなった場合の被害は計り知れません」

という風に解説をしてもらっていたところ、それに対してスバルが口をはさんだ。

「いや、それなら入口近くに兵士を待機させたり、そもそも、こんな少数で来る必要が……」

（スバルが少し頭のいい発言をしてる……）

パッと聞き真っ当な意見を言っているスバルの横顔を、ティアナは物珍しげに眺めた。忘れがちだが、彼女は士官学校を主席で卒業するくらいの頭は持っているのだ。が、

スバルの意見に対し、ヒューバートはダメダメだ、と言わんばかりにため息をついた。

「暴星魔物がバリアを張ると、ただの攻撃では傷一つ付かないことくらい、分かりますよね？」

「そ、それは分かるけど……」

「そんな魔物に対し、そのバリアの対抗策を持たない兵士が数百集まっても、無駄な犠牲を払うだけですよ」

「そ……そっか」

その機械的な物言いに、明らかにスバルが凹んでいるのを尻目に、ティアナはぼうっと自分の反対側を眺めていた。

そちらには、シェリアと楽しげに喋っているキャロとエリオがいた。

十メートルくらい離れているので、会話の内容はうまく聞き取れないが、そんなものよりも、二人の表情に目が行った。

（あんな子供みたいな顔するんだ、あの二人）

瞳を輝かせ、熱心にシェリアの話すことを聞いているその顔つきは、普段の二人からは想像がつかないような、無邪気さが湧き出ていた。

（フェイトさんにもあんな顔、しないわねぇ）

二人は、訳あって保護者代理であるフェイト執務官の世話になっている。その経緯は齢十歳の子供には重すぎるものがあるが、今の生活はとても充実しているらしく、不平不満はないという……が、

（何ていうか……変なところで子供っぽくないのよねー。押し殺しているというか）

彼らの言動、その端々からどこか無理に我慢しているものが感ぜられてしまうのだ。別にそれが悪いこととは言わない。むしろ、『スターズ４のティアナ』としては非常に助かっている。ワガママも言わなければ、ちょっとのことで文句をブー垂れることもない。機動六課内の仕事仲間としては非常にいい人たちに分類されるだろう。

一方で『二人の年上の友人であるティアナ』としては心配なのだ。抑圧されたものというのは、やがて歪んだ形で表面化されてしまうものだ。もしそれが起きてしまえば、本人と周りの人は傷つくだろう。どこかで、何かしらのガス抜きをすべきだと考えていたのだが――

（あんなにいい顔ができるなら、安心かな？）

どうもその必要は少しだけ省かれたように見える。あのシェリアという女性の何に

よってなせる技なのか知らないが、今、二人の心には『子供』が戻ってきている。
（必要なのは優しいお母さんって感じなのかしら？　フェイトさんにそれを求めるのは……）
そこまで考えて、ティアナはそれ以上の思考は止めた。これ以上こちらが無駄に考えるのは、何か不可侵な問題に足を突っ込むような気がしてならなかったからだ。
何にせよ、無事に終わったらシェリアと話でもしよう――それだけは忘れたらいけない

泉下の戦い　1

「何、これ……？」

装置の設置が終わったと聞いて、ティアナが放った第一声がそれだった。

まず、ソレはよく分からん黒い土台の上で、ぴょんぴょん跳ねている。緑色の丸い体に、申し訳程度に細長い『目』のようなものが付いている。時折両サイドの羽のような耳のようなよく分からん部分をパタパタさせているが、それでボディを浮かせているのだろうか？それと、もう一つ特徴的なのが、時折何か言語を発していることだ。ただ、これも何かおかしい。

『ネライウツゼ！　ネライウツゼ！』

『ウッソ、ヒトゴロシ！　ウッソ、ヒトゴロシ！』

『ワカゲノイタリ！　ワカゲノイタリ！』

こんな感じである。なんか物騒なセリフも聞こえる。設計者は何を思ってこんな声を録音したのだろうか。あと、ウッソって誰だ。

このように見た目は可愛らしいっちゃ可愛らしいが、何かすごくイケナイモノのような感じがするのである……著作権的に。その存在に、フォワード陣は一人を除いて怪訝

な顔をし、アスベルたちは『またこういう……』みたいな顔をしている。
「可愛いー！　これ、すごいですね！　何て言うんですか？」
　無邪気にスバルが設置した人たち――例のリチャード陛下とマリクのことだが――に聞いている。ツッコミよりも先にその他の感想が浮かぶのかあんたは。
「ああ、そいつの名前なんだが、取扱説明書の最後に書いてあったぞ。確かハ……」
「それ以上はイケナイ！」
「モガッ」
　マリクがソレの名前を告げようとした瞬間、ヒューバートが大慌てで口を塞いだ。マリクがそれを振り払い。
「何をするんだ、ヒューバート」
「いえ、よくわからないのですが、ソレの呼称を言ってしまうと、こう……抗議行動が起こる予感がして……」
　先程まで、随分はっきりものを言いまくっていたヒューバートにしては、いまいち明確ではない態度に、周りの人間はもれなく首を傾げる。
「何だ？　お前らしくない、はっきり言え」
「あ、いえ大したことは無いのですが……ともかく」
　と、そこで一つ咳払い。

「それで、これがいったい何の役割をするんです」
「じゃあ……そこは僕が説明しよう」
そう言って、リチャードはそのピョンピョン跳ね跳んでいる球体を手に持った。
「これは中にあるダークボトル用の液体……まあ、解らない人の為に説明すると、魔物をおびき寄せる効力を持つ物なんだけど、それを散布する機械なんだ」
「要するにスプリンクラーですか？」
エリオの発言に、リチャードは少し困ったような顔をした。
「すぷりんくらー、というものが何なのかは知らないけど、まあ、好きにイメージすればいいさ」
どうやらスプリンクラーを知らないようだった。
「あの……」
次に声を発したのはキャロだった。そういえば、いつまで彼女はフリードを帽子の中に入れているつもりなのだろう。気になりはするが、ここで言う事でもないだろう。
「どうしたんだい？　キャロ」
リチャードが一層優しげな声音で聞いた。整った顔立ちと相まって、どこか色気があるような感じがする。まあ、男の色気など、ティアナにはよく解らないが。
「あのバリアを張る魔物のこと『暴星魔物』って言いましたよね？」

「ああ、それが？」
「……あの魔物がバリアを張ったときの対策は、あるんでしょうか？」
キャロが聞いたことは、今回の件に於いては一番の肝心要だった。
実際問題、ティアナたちにはバリアを破る術は無い。こちらに来る以前は『張られる前に殺る』という至極単純な応急案を実行していたが、タダでさえしぶとい敵を数秒で倒そうというのは、中々実現しないもので、討伐率は半分にも満たない。残りの半分以上の時は、その魔物たちが猛威を振るうのを、ただ見送り、それが過ぎて行くのを待っているだけになるのだ。何度何もできない悔しさと不甲斐ない己に憤りを感じたか解らない。
「私たちの世界には、バリアを割る方法が存在しませんでした。誰かが抹消したのか、そもそも、そんなものが最初からあったのか、それすら解りません……」
ティアナは一呼吸置いて、目の前の五人に問うた。
「だから、私は一縷の希望を持って聞きます。皆さんに、あの暴星魔物のバリアを打ち破る方法がありますか？」
そう言った後、我ながら大仰な言い方をしたものだ、と思った。だが、それが今の気持ちに不相応なものとは思わなかった。
管理局、ひいてはミッドチルダの運命は、この人たちに掛かっていると言っても過言

ではない……そう考えているからだ。

彼女の問いに対して、口を開いたのはアスベルだった。

「……その様子だと、君たちの世界は、大分ギリギリの所にあるみたいだね……」

「はい……」

「安心してくれ、俺たちにはその力はあるし、君たちの世界の事も、頑張って助けて見せる」

一見どこまでも優しいそのアスベルの物言いは、それでもどこか毅然としていて、力強いものだった。そして、そんな彼から放たれる雰囲気は、歴戦の勇士のそれを彷彿とさせた。

「……ありがとう、ございます」

ティアナは思わず、一礼していた。何故かは自分にもよく分からない。けれども、必要に思えたのだ。

彼の言葉に、ティアナたちはある種の光明を感じ取っていた。

最も大きな問題点であるバリアの対抗策。それをアスベルたちは持っている。そんな彼らが協力をすると言っている。

これで、魔物事件に進展が――なら、何としても。

「生き残りましょう。私たちも出来る限り努力します」

スバル以下三人は一様にはっきりと頷いた。
「……いい心がけだ」
そう言ってマリクは、口の端を少し吊り上げた。
「さあ、陛下。そろそろおっぱじめましょう」
「ああ……さて、頼むよ」
リチャードが球体の裏側にある蓋を外した。そこには何かを調節するつまみだけが引っ付いていた。他には何もない。非常にシンプルだ。
リチャードは、そのつまみを指先でゆっくり時計回りに約２７０度回した。にわかに緑のそれの瞳が赤く光る。
『サンプ！　サンプ！　モンス、カモン！　モンス、カモン！』
回し終えると、スプリンクラーはさらに激しく飛び跳ねだした。……羽の部分から、薄く黒い霧を出しながら。
「さぁ、気を引き締めよう。敵は意外とすぐ来る」
リチャードは腰に下げた細剣を引き抜いた。薄く蒼い刀身に細やかな装飾が施され、一目でそれが上等なものだと解る。
リチャードに続き、その場にいる全員が得物をその手に掴む。ティアナは、さりげなくフォワードメンバー以外の武器に目をやる。

（アスベルさんは普通の直剣。ヒューバートは拳銃二本……両側面についている金属板みたいなのが気になるわね。マリクさんは……ブーメラン？　シェリアさんはナイフ）

パッパと頭の中の人物名鑑に武器の種類を書き足していく。センターガードという、チームの司令塔の役割を持つティアナにとっては、これは癖みたいなものだ。ここから、作戦やフォーメーションを大雑把に決めていくのだが、今回ばかりは予想できない。なにしろ出会って三十分も経っていないような間柄だ。得意な間合いや攻撃方法、回復手段はどれくらいで、そもそも実力は如何程か……

「来た、構えて！」

シェリアの声でそれまでの思索を打ち止め、ティアナは辺りを見回した――すると

「な、何なのこれ……？」

ぐるりと上空を埋め尽くすほどの魔物。翼竜のような姿をしたもの、エイのようなもの、童話に出てくるオバケのようなもの……その殆どが、黒々とした体色から察するに暴星魔物だ。

ミッドチルダの、魔導師や一般人は、暴星魔物一匹に何人も傷つけ――あるいは死んでいった。ある者は焼かれ、ある者はバラバラに引き裂かれ、その身から臓物を撒き散らし、また、ある者はわけのわからない光線のようなもので急所を貫かれた。

（一歩間違えれば、私たちも……）

首筋に死神の鎌を押し付けられたような悪寒が走った。
一、二、三、十、二十？いや、もっと――あまりの数に、頭がじわじわと恐怖の色で塗り潰されていく。
不安に駆られ、つい自分の周りの人達に視線を走らせる。まるで誰かに縋り付くように。しかし、この状況に、危機感あるいは恐怖心を感じていない者はいないようだった。おそらくある程度慣れているであろうアスベルたちも険しい表情で上空を睨みつけている。フォワード陣に至っては、もはや茫然自失の体を相なしている。
ティアナ自身、この絶体絶命、多勢に無勢の状態を前に殆ど思考停止している。
（ダメだ、落ち着け。まだ死ぬとは決まっていない。冷静に……）
――ぎぃおおおおぉぉぉん……
恐怖で凝り固まりかけた頭が動くようになったのは、皮肉にもその恐怖の対象の雄叫びだった。
ハッとしたティアナは、精一杯肺に息を吸い込んだ。
「恐るなー」
七割くらい自分に言い聞かせるように叫んだ。そのまま、フォワード陣に向かって矢継ぎ早に指示を出す。
「スバル、ウィングロード。エリオとキャロはフリードに乗って。一撃離脱で行きま

しょう！」

ティアナと同じように、今まで硬直していたのか、その声にハッとして三人は指示の通りに動く。

スバルが地面にリボルバーナックルを叩きつけ、ウィングロードを展開するのと、キャロが帽子から小さな白龍を出し、エリオと共に騎乗するのと、魔物たちがこちらに向かって進行を開始したのは、ほぼ同時だった。

「大したものだな、空中に道を作るなんて」

マリクはそう言って、ブーメランを振るい、近づく敵に牽制をかける。

「道、使わせてもらうよ！」

アスベルは剣を引き抜いた状態で、スバルが作った道を駆け上がる。続いて、ヒューバート、スバルがその後を行く。

戦いの、始まりだ

＊

空中にまるでカーペットのように敷き詰められたウィングロード。その上では、剣士と銃士と拳士が、魔物を相手取って戦っていた。

「覇道、滅封！」
　アスベルが剣を強く振り上げると、刀身そのものから巨大な爆炎の衝撃波を撃ち放つ。その大きさは人を容易く飲み込めるであろう。そして、威力自体もかなりのもののようだ。熱線に触れた魔物は全身にぶすぶすと煙を浮きだたせ、怒り狂ったように雄叫びを上げる。一撃でだいぶ堪えているようだ。パッと見ただけなら、スバルの師匠の得意技にもそうは引けを取らない威力に思えた。
「やぁ！」
　スバルは目の前に迫り来る魔物の顔面を殴り飛ばし、すぐにその場から離脱する。スバルたちの『道』は縦横無尽、あらゆる方向に展開されており、足場としては現状充分にその役割を果たしていると言える。
『マスター、九時の方角から炎弾が来ます』
　ローラーブーツ型のデバイス『マッハキャリバー』が敵の追撃を予告する。スバルはそれに従い、九十度真上に飛ぶことでそれをいなす。
「ほいっと！」
　事も無げに着地して、そのまま風の道を駆け抜ける。
「ありがとうー、マッハキャリバー」
『当然のことをしたまでです。さあ、五時の方角、鳥獣型が来ます』

「えっ!?」

いくらなんでも早すぎる。左側から来たと思ったら、今度は後ろ――

疑問を浮かべている隙を突いて、漆黒の怪鳥が鋭い鉤爪を紅く光らせ、こちらに突き立てようと上空から迫る。

しかし、スバルは慌てなかった。

「ただのひっかきならさ!」

魔法攻撃ならいざ知らず、物理的な攻撃は、スバルたちが纏う『バリアジャケット』には全く通じない。このただの布にも思える防護服には、薄く防御フィールドが展開されている。例えビルにものすごい勢いで叩きつけられようが、何されようが、本人にはカスリ傷一つつかない。そんな打算の元、スバルは渾身の右ストレートを相手の土手っ腹に叩き込もうと飛び上がった。

そして、今まさに拳と爪が交差しようとした時――

『! 攻撃を防いでください!』

相棒から切迫した音声が届いた。

突然のことで、スバルは突き出していた右拳で怪鳥の鋭爪を、ほぼ反射的に弾いた。そのまま弾いた反動を利用して、先ほど居た位置からさらに内側にある道に着地する。

「どうしたの、マッハキャリバー? ただの物理攻撃なら……」

『妙ではありませんか？』
「何がさ」
『あの爪です』
「爪……」
　目を凝らし、自分の上空五メートル上でホバリングをする怪鳥のシワだらけの足を凝視する。
　その爪は、見るからに殺傷能力が高そうな外形をしている。怪鳥自体も巨大だが、その巨躯に伴って、大きさも相当なものだ。一本でスバルの胴体と同じくらい太さがありそうだ。それが三本。
「どこら辺が妙なの？」
『……あの爪の色、はどうですか？』
　色……色は鮮紅色とでも言おうか。見事な赤色で、その光沢のある色彩はまるで……
「暴星バリア……？」
『おそらくは』
　マッハキャリバーが何を考えているのか――スバルには解った。
　暴星バリアがどのような力を持つのか、未だにその全貌は解明されていない。もし、仮にこちらの防御を突き破る力があるのだとしたら……あの体躯だ。スバルの大して

力の乗らないパンチ一発でそうやすやすと怯んではくれないだろう。致命傷は避けられなかったかもしれない。

「どうする？　って言っても……」

『私たちには殴ることしかできないでしょう？　注意はすべきですけど』

「だよねぇ！」

ウィングロードを力の限り蹴り上げ、怪鳥に接近する。

難しいことなど考えてみても、この場においては意味がないのだ。自分はただティアナが――親友が導いたものに向かってただ真っ直ぐに突っ込むだけだ。

リボルバーナックルから薬莢が排出される。それと同時に、装備者に魔力を補填する。

「今即興で思いついた技、行っくよー！」

目標は、威嚇のつもりか、上空で大口を開けた相手の顔面。跳躍は十分な域にまで達し、平行な目線で敵を捉えた。

後ろに限界まで引き絞った拳が弾丸のごとく飛び出す。その一撃は若干当初の予定からずれ、敵の横面を捉えた。鉄を殴ったような衝撃とともに、直撃部分の嘴がひび割れる。そこに――

――バチチチチィ……

まるでプラズマがスパークしたような魔力の炸裂音。拳の先から、微細な魔力弾を連続かつ超スピードで放出する。弾の威力は砲撃系には劣るだろうが、鉄拳で砕いた部分に直撃する分、ダメージは相当のものだ。怪鳥の顔面は、どんどんボロボロと崩れていく。

あの魔物には、ディバインバスター――砲撃魔法は使えない。強力ではあるが、前動作とモーションの大きさのせいで避けられかねない。それならば、と考えたのだ。

思いつきにしては良く出来た、と内心得意げになった時――

『熱源反応！　炎熱系魔法！　退避してください！』

マッハキャリバーの警戒音声が鳴り響く。

「くっ！」

追撃を諦め、再び元の足場に舞い戻り、上から降り注ぐ四発の炎弾――というよりは、炎柱だが――を巧みにステップで回避する。

「どこから!?」

『先ほどの魔物とほぼ反対側。おそらく誘導制御型の敵です』

チラと逆方向を見る。その五メートルくらい先には、目玉の化物がふよふよと浮かんでいた。

先ほどの怪鳥は、怒り心頭といった感じか、翼を激しく羽ばたかせている。

その翼を大きくスバルに向かって振り下ろした。巨大なそれからは、黒々とした羽が、大量に彼女に向かって射出された。

「しまった……！」

一つ一つに魔力反応がある。バリアジャケットでは防げない。あの量と範囲では躱しきれない。体の頑丈さには自信はあるが、耐えきれるかどうかわからない。

そう感じた瞬間、スバルは自分が何を相手にしていたのか改めて思い知った。そう、この魔物たちはそこいらの魔道師ではまるで歯が立たない。なのはやフェイトといった教導メンバーが出張ってようやく倒せる……そんな連中だ。それをひよっこの自分が一人で倒そうなどと――

そんな弱気な考えが、現状打開に対する諦めと共に浮かんだ。

黒い凶弾が迫る――

「リヴグラビティ！」

しかし、その弾丸はスバルの目の前に展開された巨大なエネルギー球体に遮られた。

バチバチと雷が爆ぜるような騒音の中、そっけない口調が後ろから耳を突く。

「まったく……一人で先行するからですよ。スバル・ナカジマ」

「あ、ヒューバート……くん？」

突然の事で面食らって、気の抜けた返答をすると、メガネの少年はやれやれと肩をすくめた。
「考えなしに突っ込まないでください。身体の頑丈さに自信があるのかもしれませんが」
「い、いや、でもさっき……」
「ああ、スキアーイーグルの羽は非常に鋭利で、しかもちょっとしたバリアくらいでは防ぎようがないんです。失礼ですが、相殺という手段で防いだんですよ」
イマイチ質問の意図が解りきって無いようだった。スキアーなんとか言う鳥の名前はどうでも良かった。そんなことより――
「さっきの技は?」
突如現れた幅四メートルはあろうエネルギー球体。あれは一体何なのか。
スバルの問いに、ヒューバートは手元の二丁拳銃から小さな薬きょうを排出させながら、事も無げに答えた。
「あれが、貴方たちが欲している『暴星バリアを壊せるもの』ですよ」
（あれが……）
あの感じ。おそらくミッドチルダ式でもベルカ式でもない魔法。自分たちのものとは明らかに異質なもの。その存在に、スバルは、安堵とある種の高揚感を感じずにはい

られなかった。

逆転の機会を得た事に対する高揚感だ。

泉下の戦い　2

「其は耐え無き息吹、フォトンブレイズ！」

マリクの術の詠唱が終わると同時に、ティアナに向かって牙を剥けていた竜の魔物が爆ぜる。二メートル離れた距離から、彼女の肌を一瞬だけ熱が襲う。そうして怯んだ隙に、ティアナは対象との距離を引き離した。そこまで規模の大きい爆発ではないが、威力はあるらしい。その暗色系統で色づけされた鋭利なフォルムの顔面は、醜く焼け爛れている。

「ありがとうございます！」

「気にするな、次が来るぞ」

短く言葉を交わし、思考を戦場に引き戻す。

端的に言って、経過は非常に良い物となっている。魔物は基本的に黒い霧を放つあの機械のところに集まろうとする。つまりティアナたちが居る岩場に雪崩れ込んで来るはずなのだが、連中は目の前に敵が居ると、どうやらそっちを優先したがるらしい。上空で旋回を続けるキャロとエリオ、そしてその二人を乗せるフリードに標的を絞る。そこをティアナたちが魔法で狙い撃つのである。

しかし、この方法で全ての魔物を処理できるわけではない。その他の真っ直ぐ突っ込んで来ようとする連中は、アスベルとヒューバート、そしてスバルの方へと飛んでいく。それでも、先程のようにこちらに向かう奴らは、各々で処理をするという事になっている。

ここでティアナが驚いているのは、この形が全て「何の相談も無しに決まった」という事だ。不思議な事に、エリオは自分たちに近づく魔物を追い払う程度しか攻撃しない。キャロはキャロで、フリードに飛行に関する指示以外は出していないのか、まったくあの白竜のブレスは吐き出されない。マリク、シェリア、リチャードの三名はひたすら魔法を行使して、敵を撃ち落とす。

「来たれ安息無き剣、連なるは悲痛！・レストレスソード！」

リチャードが唱えると、上空で黒々とした闇が円状に、今まさにキャロ達に向かって火球を吐きださんとする魔物の足元に展開される。即座にターゲットの頭上から、次々と漆黒の大剣が打ち出され、闇を縁取り、彩る。その刃の落着地点から次々と黒い衝撃波が発せられ、円の中心部に居る魔物を絶命させる。

リチャードたちが使う魔法は、ティアナが知るようなベルカ、ミッドのそれではないようだった。彼らの放つ魔法はあの暴星魔物と同じだ。その形式は、基本的に魔法陣の展開が必要無い。代わりにというべきか、殆どの場合に於いてその力を行使するには、

使用したい魔法それぞれに予め決められた呪文を唱える必要があるようだ。
「ティアナ、右から来るぞ！」
声に誘われ、三時方向に意識を向ける――同時にデバイスに備えられたカートリッジを二個消費し、魔力スフィアを展開する。
彼女のデバイスのサポートもあり、オレンジの魔力球が滞りなく造り出される。その数十。対象は、接近してくる翼竜型の魔物。速度がある。時間がない。肉薄されればひとたまりもない。
（確実に、そして最速で全弾撃ち込む……！）
「クロスファイア！」
敵の正面に銃口を突き付け、引き金となる単語を言い放つと、魔力スフィアを一瞬でデバイスの洞に束ねる。
「シュート！」
そして、砲撃。殺傷力を持った魔力が恐るべきスピードで黒い翼竜を貫く。
（ただの魔物ならこれで終わりだけど！）
奴らはこの程度では沈まない。少女は再び得物を持つその手に力を入れる。
「やあああぁぁぁぁ！」
勢い任せに、クロスミラージュの銃身から連続十五発の弾丸を叩き込む。一発一発の

重みは然したるものではないが、それなりのダメージにはなるようだ。魔物はティアナの抵抗に対して激昂し、頭をもたげてその鋭い嘴を裂いた。

（ブレス系の攻撃……！）

変にゆったりとした動作からそう判断した。走り回らず、水面を背後に立つ。

数秒と経たずに吐き出される、エネルギーの塊。正しく紙一重といったところでそれを右側に振り切るように回避する。

「きっつー……」

なんとかいなせたが、心の中ではてんやわんやだ。一撃一撃が致死級のそれは、間髪入れずにティアナを責めたてる。

第二撃が放たれようとしたそんな折、その魔物に素早く近づく人影を見た。

「……おおっ！」

リチャードだ。引き抜いた細剣を魔物の表皮に突き立てる。その刃は弾かれもせず、烈風を纏って対象を貫いた！

――グオオオォ！

「追撃を！」

大きくノックバックしながら、黒い翼竜が怒号を響かせる。リチャードがティアナに後を託すかのように叫ぶ。

慄く暇もなく、ティアナは再びカートリッジを消費して魔力を増大させる。今度はその全てを銃身に押し込み、まっすぐ銃口を対象に向ける。
「ファントム……」
今ある魔力のほとんどを、この一撃にぶち込む！
「ブレイサアアアアアアア！」
叫びと共に、彼女の最高瞬間火力が打ち出される。翼竜の全身を飲まんとするほどの魔力の塊は、防御の暇すら与えない。
跡には既に、亡骸となった化け物の姿しか残らなかった
＊
「……これで、最後か？」
肩で息をしながら、アスベルは周囲を見回していった。
「そうでなければ困るのですがね……」
「ねー……」
満身創痍といった感じのヒューバートに、疲労困ぱいといった感じのスバルが同調した。
今先ほど自分たちの目の前から落ちていった一つ目の魔物は、十メートルほど落下したのち、派手に水音を立てて水没した。

「……こんなに動いたのは久しぶりだよ……げほっ」
あまりにも息を切らせてしまったせいで、少し咳き込んでしまったようだ。
「兄さん、少し運動不足なのでは……がほっ」
「とにかく下にもど……げーほげほ」
『少しわざとらしいですねマスター』
ちょっとノッてみたら、デバイスから突っ込みが入った。なんか最近冷たい気がする。
しかしながら、スバル自身も全く消耗していないわけではない。魔力はカラカラだし、背中は火傷の痛みでひりひりする。どうにもバリアジャケットでも熱までは完璧にシャットアウトできなかったようだ。
「あれ、今声が聞こえたような……」
マッハキャリバーの突っ込みが聞こえたのか、アスベルが何事かと周囲を見回した。
「えっと、この子が話したんだけど……」
そう言って、スバルは自分の足元の相棒を指差した。案の定、二人とも「はぁ？」みたいな顔をした。
「靴が……？」
「そう」

「ふん、バカなことを言わないでください。いくらなんでも靴がしゃべるなんて……」
『残念ながらしゃべります』
「ほ、本当にしゃべった!?」
　などと言いながらのろのろと空の道を降りていく。
「しかし、すごいな」
「何が?」
「この道だよ」
　そういってアスベルはつま先でトントンと足元のウィングロードをノックした。
「あの一瞬で、ここまでの足場を即席で作れるなんて……　俺は、輝術には大して詳しくないけど、君たちの世界の人々は皆こんなことができるのかい?」
　アスベルは本気で感心しているようで、その表情はまるで面白い手品でも見せてもらった子供のような顔をしていた。
「んー、この魔法は少し……何て言うか、ニッチなモノなんで、使える人はそんなに多くないです。私の知り合いにもコレが使えるのは数人しかいませんし」
　ニッチなモノなんて言ってしまったが、事実主流にある魔法か言われれば否と答えざるを得ない。何て言ったって、ほとんどこの魔法はスバルのオリジナルだ。
「へー、すごいなぁ!　そんな魔法を使えるのかスバルは!」

「え、ま、まあそうですよ。ははは……」

あんまりにも臆面なく誉めそやされるので、思わずたじろいでしまった。自分より4歳くらいは年が上だろうに、全くそんな感じがしない。それはきっと、このアスベルという人物の素直さのせいなのだろう。

（何か、今までにないタイプの人だね、アスベルさんって）

（どうしたのよ急に？　さっさと戻ってきなさい）

友人に同意をもらおうとこっそり念話で話してみたが、にべもなく通話を切られた。何となく切ない。

そうこうしているうちに、小島までたどり着いた。

みんな往々にして疲れ切ってしまっているようだ。二人ほど座り込んでいるが、元々スタミナの無いキャロや、殺到する魔物を必死こいて捌いていただろうティアナの二人はぐったりしてても仕方ない。

「みなさんおつかれさま……」

「おつかれさまー……」

「本当に疲れてしまったよ。マリク、僕はもうそろそろ有休を使いたいのだけど」

「寝言は寝てから仰ってくださいよ陛下……まだ何の問題も片付いてないんです」

「ああ、それもそうだったね……」

などと金髪王子とナイスミドルが小芝居を打っているが、おおむね平気そうだった。何かしらの治癒魔法のおかげか、今来たばかりのスバルたち三人以外の肌には、かすり傷一つついていない。

「キャロ、もうみんなに治癒魔法かけたの？」

そうキャロに聞くと、キャロはふるふると首を横に振った。

「わたしがかけようとしたんですけど、シェリアさんが代わりにやってくれたんです。ね、フリード？」

キャロの膝の上で小さくなったフリードは、きゅうと鳴いて主人に答えた。

「そうなんだ」

「凄かったわよ、シェリアさんの治癒魔法」

不意にティアナが口を挟んできた。

「私、さっきの戦闘で二の腕の辺りざっくりやられたんだけど、あの人のおかげできれいさっぱりよ。世の中、すごい使い手もいたものね」

そういうティアナの腕は、確かに傷一つないようだった。

「へー……」

何の気なしに話している風に言ったが、彼女は本気で感心しているように思えた。わざわざ自分に話したのがその証拠だ。

「あなたは、ケガはないかしら？」
　噂をすればなんとやらというのだろうか、シェリア自身がスバルに声をかけてきた。
「え、えーと、ちょっと火傷はしたかなー……みたいな？」
「あら、それは大変ね。どこかしら？」
「せ、背中……」
「そう、じゃあ失礼して……」
　そういってシェリアは、スバルの背中の服を捲り上げた。男性陣がいる方とスバルの間に挟むように位置を取る。自分よりおよそ１０センチくらい背が高いので、姿は見えないはずだ。
「あっ、つつつ……」
「ごめんなさい、少し我慢して……水ぶくれになっているわね。潰さないようにすれば数日で痕もなく元通りのはずよ」
「え？　潰しちゃダメなんですか？」
「水ぶくれの中は、傷を治す物質で満たされているの。それに頼るだけで十分な治療になるわよ。冷やすだけ冷やした方が良いけど」
「じゃあ、氷嚢ですか？」
「氷嚢よりも水ね。とりあえず外に出たらお風呂で……」

てきぱきと答えるさまが、看護師か何かみたいだった。ひょっとしたら病院か何かの関係者かな、などと思っていた時。

――ヒィオオオオオン

どこかで、獣の鳴き声がした。

「まだ敵が残ってたぞ！」

マリクの声が響く。その場にいた全員が、鳴き声の方向に視線を向けると、そこには、今までの魔物の何倍もの大きさを誇る漆黒の巨鳥が、自分たちを上空から睥睨していた。

「お、大きい……」

「どこに居たんだ……！」

エリオがキャロを背にするように槍を構えながら言った。

「おそらく水中に潜んでいたのでしょう。まったく、手間のかかる……！」

ヒューバートはそう呟いて、得物をその手に取る。よく見れば、双翼の端からポタポタと水滴を垂らしている。

『水中での行動もできると考えていいでしょう』

「そうね……また潜られたら厄介よ。さっさと片を付けましょう」

クロスミラージュと、ティアナが言うよりも速く巨鳥は行動し始めていた。高度を高

くし、さらにそこから恐ろしいスピードでこちらに向かって滑空、突進をしてきた。
「みんな、下がって！」
アスベルが叫んだ。全員に退避を命じたのだ。しかし、そういった本人は敵の進行ルートに立ちふさがった。
「アスベル！」
「俺が受け止めるから、その間に倒すんだ！」
「馬鹿を言わないでくださいよ！　兄さん一人で止められるわけが……」
「やってみなきゃわかんないだろ？　安心してくれ、どうにかしてみせる」
アスベルは剣を抜き、目の前の目標と向き合った。1秒も満たない内に、アスベルが魔物と接触する。
鉄と鉄がぶつかり合ったような音が響いた。
「ぐ、うううううう！」
アスベルは見事に敵を受け止めきっていた。しかし、この金縛り状態はいつまでも持たないだろう。
「アスベル、早く退いてくれ！　そこに居たら、君も巻き添えに……」
「ダメだ、ここで離れたらこいつを逃すことになる！　それならここで早く倒すべきだ！」

アスベルの言う通りかもしれない。先ほどのスピードだと、おそらくキャロのフリードでも捕まえられないし、自分のウィングロードでは移動の融通が利かなさ過ぎる。かといってティアナの射撃魔法では残念ながら仕留められるかどうかも怪しい。ほかの人の魔法については未知数だが、反応からみると、自由にした状態では厳しいものがあることは明白だ。そうなればバインドで捕えればいいのかもしれないが、サイズが大きすぎてどうにもならない。

この場にいる人間の一瞬の逡巡を察したとでも言うのか、魔物がにわかに輝きだした。

『マスター、魔力の増大反応です！』

「なんだって!?」

マッハキャリバーが告げた時には、すでに遅かった。敵の輝きが収まった瞬間に、スバルたちの頭上から大量の黒い稲妻が降り注ぎ、自分たちを打ちのめした。

痛みに意識が消え入る間際の光景は、それでも立ち続けるアスベルの背中と、低く唸り声を上げる魔物の姿だった。